

多汗症の手

南アルプス市立白根巨摩中学校三年 荻野 陽向

二〇一九年、三月。新型コロナウイルスの感染拡大が猛威を振るう。未知とのウイルスに抗うために日本は日本独自に様々な感染防止策を編み出した。中でも有名な防止策「『三密』を避ける」は、私の生活を楽にするものだった。

幼い頃から私は周りの人々よりも汗をかいていた。特に手や顔、脇から湧く汗の量は尋常ではなかった。そのため、事あるごとに周りからは汗のことを言われてしまう。「本当のことだから仕方がない」と思うが、あまりよい気持ちにはならない。言われることに対して苦になるわけではない。ただ、毎日のように言われてしまうため、日に日に劣等感が肥大する感覚を覚える。このように受け流しながら生きているが、傷つけられた過去もある。

小学校中学年の頃、卒業式の練習での出来事。その頃私は、自分の手から湧く手汗の量が人一倍多いことは自覚していた。また、同学年は皆私の手汗が尋常ではないことを知っているようだった。その日、一人の教師は「心を一つにするために手を繋ぎましょう。」と指示を出した。当時の私は、手汗のことをあまり人に知られたくなかった。しかし、今の状況はどうだろうか。言うまでもない。左隣は同学年の人で事情を分かっていたため、気持ち的に非常に助かった。一方、右隣は上級生の人だったため、とても申し訳ない気持ちになった。手を繋ぐ直前までハンカチやズボンなど、とりあえず汗を吸いそうな物を握りしめた。一度意識してしまうとなかなか汗は引かないもので、結局濡れた手で手を繋ぐことになった。手を繋いでいる間は生きた心地がせず、今すぐにでも手を離したい、その一心だった。手を離した後、右隣の上級生がその周辺の人々とこのような会話をしていた。

「隣の子がめっちゃ手汗かいていて気持ち悪かった。」

その上級生に同情するかのように周りの人が「最悪だったね。」と投げかけていた。会話の内容は全て聞こえていたため、傷ついた。傷ついたと同時に分かったこともあった。それは、自分が思っている以上に汗は人を不快にさせるということだ。私は、冬以外は基本的に汗をかいているので、手は常に濡れている。そのため、手が湿っていることに慣れてしまい、客観的な汗に対する見方が分からなくなっていた。考えてみれば、机の上に得体のしれない体液が付着

している時は、気味が悪いと感じる。きっと同じような感覚なのだろう。

周りの人々に体質のことを話すと一人の友人は「それ多汗症なんじゃない？」と言った。近年、多汗症はメディアで取り上げられることが多くなり、多汗症に対する理解が広まりつつあると感じられる。私も近年知ったうちの一人だ。インターネットを用いて調べると多汗症の人の特長に当てはまる部分が非常に多く、友人の言うように私は多汗症だと確信した。続けて友人は「手術したら？」と言う。会話を交わした当時は、治療法について浅はかな知識しかなかったため、手術で治す方法以外知らなかった。手術をすることで手汗に悩まされることはなくなるが、手術代がかさむことや背中から多量の汗が噴き出すことなど欠点もあると私も友人も知っていた。「他に治す方法があると良いな。」と友人は言った。私は嬉しかった。友人はよく汗をかく人ではない。まして多汗症でもない。それでも、人の立場を考えてくれたことが何よりも嬉しいことだと思った。

一人の友人だけは特別だと思う。その他の人々は皆口をそろえて言う。「かわいそうだ」と。「『かわいそうだ』って何なんだよ。」と心の中でいつもこぼす。「かわいそうだ」は嫌いな言葉だ。なぜなら、「私には簡単なことだけど、多汗症のあなたには困難だろうね。」と聞こえてしまうからだ。言っている側はそのようなつもりではないのだろう。しかし、私も相手も潜在意識が備わっている。私は今まで「多汗症だから」特別だと扱われていた。「なぜ人より汗を多くかく体質に生まれただけで、周りと同じように扱われないのだろうか。」そのようなことをいつも考えていた。多汗症以外に手に関わることで悩んでいることはない。それでも、人々は多汗症という部分を切り取り哀れみの眼差しを私に向ける。多汗症で不利なことももちろんある。それでも、私は周りの人々と同じように手を使って作業をすることができる。だから、たった一点だけ人と違うところを取り上げて、その人と接する際に違うところを強調することがなくなることを願っていた。

今、私は私自身が心の壁を築いているのかもしれないと感じる。自分自身に劣等感を抱き、周りからの対応により劣等感はさらに膨れる。はじめから劣等感による心の壁が存在しなければ、周りの人々と平等に接することができたかもしれない。

誰の心にもある潜在意識が世界中から消えたら、誰もが手を繋ぎ合えるだろうか。